Case Studies 事例

CASE 2 北海道医療大学

Fビレッジへの移転を通じて 新たな「まち」と共に医療人を育む



北海道の医療を支える国内有数の医療系総合大学、北海 道医療大学。薬学、歯学から看護、リハビリ、心理まで、「多 職種連携教育」を通じて超高齢社会や高度化する医療の場 で活躍する多様な専門職を育成している。1974年の開学 から50年、現在は札幌近郊の当別町と札幌市あいの里に キャンパスを構えるが、2028年4月、その歴史に大きな一 歩を刻む。全ての学部機能を、プロ野球・北海道日本ハム ファイターズの本拠地「エスコンフィールドHOKKAIDO」 を中核とする「北海道ボールパークFビレッジ」(北広島市) に全面移転するのである。

地方大学が抱える課題に対し、同大学はなぜ、未来を託す 場所にFビレッジを選んだのか。その大胆な決断の背景に ある緻密な戦略と、地域と共に描く未来像について、学校法 人東日本学園の鈴木英二理事長に聞いた。

未来への危機感が生んだ、 理事会の「机上訓練 |

「移転の検討を始めたのは3年ほど前。全ての議論の根 底には、やはり18歳人口の減少という、避けては通れない 未来がありましたし

鈴木理事長は、複合的な課題が移転検討の引き金になっ たと語る。

「本学が位置する当別町は、冬になるとJRが運休するこ とも珍しくありません。国家試験や卒業を控えた1~3月 という最も大事な時期に学生が大学に来られなくなった り、札幌に帰れなくなったりする事態が起きていました。ま た、開学から50年が経過し施設の老朽化も深刻でした|

このままでは大学の魅力を維持し、社会の期待に応え続 けることが困難になる。その強い危機感から、理事会で将 来のあらゆる可能性を探る「机上訓練」を行ったという。



理事長 鈴木英二 氏

「M&Aや公立大学への転換、そしてキャンパス移転。札 幌市内等複数の候補地を検討のテーブルに載せ、あらゆる 選択肢を本気でシミュレーションしたのですし

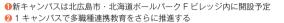
F ビレッジという未来への選択と、 地域との誠実な対話

移転先として、なぜFビレッジだったのか。それは、単な る利便性の向上に留まらない、大学と地域の未来を共創す るパートナーとしての魅力があったからだ。

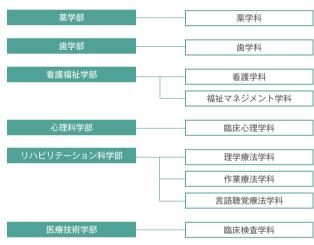
「Fビレッジは単なるボールパークではなく、一つの『ま ち』を創るという壮大な構想です。そのなかで教育・研究機 関は重要な役割を担う。われわれの目指す方向性と完全に 一致しました。また、新千歳空港と札幌駅のほぼ中間に位 置し、2028年にはキャンパス直結の新駅も開業予定です。 札幌まで15分で空港にも近いというアクセスは、学生募集 はもちろん、国際化を推進する上でも計り知れない価値が ありますし

しかし、その決断で課題となったのが、50年にわたり大 学と共に歩んできた当別町との関係だった。「当然、町から は移転を考え直してほしいという切実な声を頂きました。 われわれが伝えたのは、短期的な視点ではなく、このまま当 別に留まることが、長い目で見て本当に地域のためになる のか、という問いです。大学が活力を失えば、いずれご迷惑 をおかけすることになる。誠意を持ってわれわれの考えを 説明し、対話を重ねました





6 学部 9 学科の医療系総合大学



※2026年4月に臨床データサイエンス学環(仮称・設置構想中)を開設

大学は、ただ去るのではない。跡地活用にも主体的に関わ り、未来への責任を果たす姿勢を示した。その想いが地域を 動かす。キャンパス裏の広大な森は新たなかたちで有効活 用することを決定。地元の若手経営者達からは「自分達で町 の未来を創ろう | とイベントが企画される等、前向きなエネ ルギーが生まれている。

「まち全体がキャンパス」へ。 産学官が一体となり推進

2028年に誕生する新キャンパスは、これまでの大学の 概念を覆す。地上10階建て規模の都市型キャンパスの中 心には、学部間の壁を取り払う「共用棟」を設置。図書館や 講義室を共有化し、学生や教員の日常的な交流を促すとと もに、同大学の多職種連携をさらに推進する。

「目指すのは、大学が地域に溶け込み、『まち全体がキャン パス』となる姿です。学生はFビレッジというまちに出て、

様々な人と交流し、学ぶ。すでに北広島市内の福祉施設や病 院、歯科技工士専門学校との連携も進んでいます。学生が地 域課題の解決に貢献し、地域が学生を育てる。そして、卒業 した学生が地域に貢献する。そんな好循環を生み出したい

大学がまちづくりに参加するという構想は、大学単独で 進めるものではなく、北広島市、Fビレッジ、近隣の大学等に より、テーマごとの「チーム」で具体化を進めている。今後 は産学官のプラットフォームを形成することも検討してい るという。

キャンパス移転による 大学と地域の未来共創

この一大プロジェクトの推進力は、北海道医療大学に根 付く「全学的な情報共有の文化」によるところが大きい。か つて50%台に低迷した歯学部の国家試験合格率を、教職員 一丸の改革で90%以上に引き上げた成功体験。そのノウ ハウは全学で共有され、組織に浸透している。 FD·SD活動 も活発で、入試結果などの情報を全教職員で共有し、常に危 機感と当事者意識を持つ文化が醸成されている。

さらにこれからの地方大学の役割について、「大学が果た すべきは教育、研究、そして社会・地域貢献です。特にわれ われのような地方の私立大学にとっては、3番目の地域貢献 がますます重要になってきます。地域に深く根ざして貢献 し、そこに有為な人材を輩出していく、そうした大学であり 続けたいのです と鈴木理事長は語る。

地方大学の改革は、地域の未来そのものを映し出す。北 海道医療大学のキャンパス構想は、単に場所を変えること を超えた、大学と地域が未来を共創するという新たなモデ ルとなりそうだ。**™** (文/金剛寺 千鶴子)